

多才なアルピニスト:小島烏水

日本測量協会 理事
瀬戸島 政博

小島烏水(うすい, 本名久太, 1873年(明治6)～1948年(昭和23))は, 日本山岳学会創設者, 山岳登山家, 紀行作家として有名であるが, 他に文芸誌の編集者, 氷河地形の研究家, 安藤広重などの浮世絵の研究家でもあり, 生業は銀行員という七つの顔を持つ多才なアルピニストであった。

新田次郎原作『劔岳 点の記』は, 三宅坂の陸地測量部の洋式木造建築物の前で, 主人公の柴崎芳太郎(1876年(明治9)～1938年(昭和13))と小島烏水が軽く会釈しながらすれ違うところから始まる¹⁾。同時代を生きた二人であるが, その生き方は大きく違っていた。

1. 生い立ち

小島烏水^{2), 3)}(写真-1)は, 1873年(明治6)12月に香川県高松市に生まれる。本名の久太は, 頼山陽の本名の久太郎にあやかって命名されたようで, 本人はそれを好まず, 文筆活動をするようになると「烏水」で通した。父親が港湾税関職員であったため, 後に横浜に移った。1892年(明治25)に横浜商業学校を卒業⁸⁾, 1896年(明治29)横浜正金銀行に入行し, 1915年(大正4)正金銀行支店長としてアメリカに渡り, ロ



写真-1 小島烏水(1873～1947)
(参考文献4)による)

サンゼルス, サンフランシスコに1927年(昭和2)までの間, 在住した。

1894年(明治27)に刊行された志賀重昂の「日本風景論」⁵⁾に感化され, 経典のように反復熟読したようである。1899年(明治32)浅間山登山を皮切りに2000m級の山岳地を跋涉し, 1903年(明治36)には「鐘ヶ嶽探検記」を青年文学雑誌『文庫』に連載して当時流行し始めた登山熱を高揚させた。その間, 『日本アルプス』の著者であるウォルター・ウェストン⁶⁾との交流が始まり, ウェストンの助言もあり, 1905年(明治38)に仲間と共に日本山岳会(当時はイギリスのアルパイン・クラブに倣って単に山岳会と言っていた)を創設した。小説『劔岳 点の記』では, この創設間もない山岳会と陸地測量部が劔岳初登頂を競うことで物語が展開していく。

1931年(昭和6)には日本山岳会初代会長に就任し, 1948年(昭和23)12月23日に死去, 74年間の生涯に30冊を数える貴重な著書を残している(表-1)。

2. 山岳縦走と日本山岳会の創設

私たちが, 小島烏水の山岳行を知る手がかりとしては著書である「日本アルプス」⁷⁾と「アルピニストの手記」⁸⁾が便利であろう。1899年(明治32)浅間山登山, 1900年(明治33)乗鞍岳登山などを皮切りに山岳行がなされたが, 烏水が注目されたのは, 1902年(明治35)8月17日に岡野金次郎と槍ヶ岳を極めたことであり, 日本近代登山の幕開けとなる輝かしい記録である。烏水の『鐘ヶ嶽探検記』の冒頭には次のように書かれている⁷⁾。

表-1 小島烏水の代表的な著書

年 月	著書名(出版社)
明治32.5	扇頭小景(新声社)
明治33.7	木蘭舟(新声社)
明治33.8	銀河(内外出版協会)
明治38.7	日本山水論(隆文館)
明治39.4	烏水全集(本郷書院)
明治41.9	山水美論(如山堂)
明治43.7	日本アルプス1(前川文栄閣)
明治44.7	日本アルプス2(前川文栄閣)
明治45.7	日本アルプス3(前川文栄閣)
大正 3. 8	浮世絵と風景画(前川文栄閣)
大正 4. 7	日本アルプス4(前川文栄閣)
昭和 3. 8	山岳趣味(毎日新聞社)
昭和6.11	江戸末期の浮世絵(梓書房)
昭和 7. 6	氷河と万年雪の山(梓書房)
昭和 9. 8	書斎の岳人(書物展望社)
昭和11. 8	アルピニストの手記(書物展望社)
昭和19.8	山岳文学(太陽出版社)
昭和24.6	山の風流使者(岡書院) 遺著

余が槍ヶ嶽登山をおもひ立ちたるは一朝一夕のことに
あらず。
何が故に然りしか。
山高ければなり。
山尖りて険しければなり。
.....
[小島烏水「日本アルプス」鐘ヶ嶽探検記 その一発端、
岩波文庫(緑135-1)から]

小島烏水らが槍ヶ岳に登頂した直前の1902年(明治35)7月7日には、陸地測量部の直井武測量手によって二等三角点の貼標作業が終了していた。そのため「鐘ヶ嶽探検記」には、

「…その頂上なる三角測量標の尖端は、難破船の檣の如く聳えて…」と書き残されている。

その後も、1903年(明治36)には金峰山・八ヶ岳・甲斐駒ヶ岳・富士山、1905年(明治38)には赤石岳、1906年(明治39)には燕岳・大天井岳・常念岳・蝶ヶ岳、1907年(明治40)には早川溪谷から大井川右俣入り、1908年(明治41)には大井川右俣からの白峰三山縦走、1909年(明治42)には赤石山脈縦走・悪沢岳・荒川岳・赤石岳(写真-2)、1910年(明治43)に



写真-2 赤石山頂の小島烏水一行(参考文献4)による

表-2 北アルプスを中心とする小島烏水らの代表的な登山行(参考文献10)に基づく)

西暦(和暦)	事 項
1891年(明治24)	7~8月 ウェストンが浅間山・槍ヶ岳・木曾駒ヶ岳登山
1894年(明治27)	7月 ウェストンが白馬岳・笠ヶ岳・常念岳・御岳登山
1900年(明治33)	10月 小島烏水、乗鞍岳登山
1902年(明治35)	山崎直方、白馬岳登山、大蓮華岳登山 8月 小島烏水・岡野金次郎、槍ヶ岳登山
1903年(明治36)	山崎直方、立山の西面にカールを発見
1906年(明治39)	7~8月 小島烏水・高頭仁兵衛ら、燕岳・大天井岳縦走
1907年(明治40)	柴崎芳太郎、劔岳・針ノ木岳などの三角測量、劔岳に登頂
1909年(明治42)	8月 石崎光瑠、河合良成ら、長次郎谷から劔岳に登頂
1910年(明治43)	7月 小島烏水ら槍ヶ岳から薬師岳縦走
1911年(明治44)	7月 小島烏水、穂高~槍ヶ岳縦走、明神岳登山
1913年(大正2)	8月 山崎直方ら、黒岳・雲の平・烏帽子岳・野口五郎岳登山
1914年(大正3)	8月 小島烏水ら、双六谷廻行、笠ヶ岳登山

は槍ヶ岳から三俣蓮華岳・鷲羽岳・黒岳(水晶岳)・雲の平・黒部源流下降・薬師岳, 1911年(明治44)には穂高岳・槍ヶ岳縦走・明神岳, 1912年(明治45)には鋸岳・仙丈ヶ岳・塩見岳, 1914年(大正3)には双六谷廻行・笠ヶ岳へと, 烏水の山岳行は1915年(大正4)の渡米まで続く⁹⁾。

表-2には, 北アルプスを中心とする小島烏水らの山岳行を示す¹⁰⁾。小島烏水の山岳行の特色として「縦走」が多い。とくに, 烏水らによる大天井岳への登攀を契機に「縦走」という登山用語が使われ始めている⁹⁾。

このような山岳行は, 年に一度の二週間の休暇を使ってなされ, 時には下山に手間取って休暇を無断延長することもあったようである。

烏水らは, 槍ヶ岳登山を切っ掛けにウェストンに会う機会ができた。その辺の経緯は「アルピニストの手記」中の「ウェストンをめぐりて」に詳述されている⁸⁾。ウェストンが烏水らと同じ横浜に在住していたこともその親交を深める一因となっていた。さらに, ウェストンの助言なども影響して, いよいよ日本山岳会の創設に向けて始動することになる。

1905年(明治38)10月に東京飯田橋の富士見楼にて日本山岳会が結成される。創立メンバーは, 小島烏水をはじめ高野鷹蔵, 武田久吉, 梅沢親光, 河田黙, 城数馬, 高頭仁兵衛の7名であり, とくに高頭は越後の豪商であり, 山岳会の資金援助をした。これ以降, 烏水は, 機関紙『山岳』(年3冊)の発行, 講演会, 山岳図書など多忙を極めることになった⁹⁾。

3. 日本地理学会創設者山崎直方との交流

1902年(明治35)に地理学者山崎直方(1870~1929年)が, 「氷河果たして本邦に存在せざりしか」という論文を発表することにより日本の氷河地形の礎を築いた。山崎は, 東京帝国大学(現在の東京大学)の地質学科を卒業し(後に東京帝国大学地理学科教授), 1898年(明治31)から1901年(明治34)までドイツ・オーストリアに留学し, ウィーン大学のA・ペンクの指導の下, アルプスの氷河地形について研究した。帰国後, 上記論文や北アルプスでの氷河地形の存在をはじめ, 立山のカール(圏谷)氷河地形(「山崎カール」)の研究, 氷

河による擦痕跡を残す両雲母花崗岩をヘットナー石(ドイツ人学者ヘットナー博士が梓川で採取)と命名するなど, わが国の氷河問題の火付け役となった。また, 1925年(大正14)には, 日本地理学会を設立し, 初代会長を務めている^{11), 12)}。

山崎直方と小島烏水は日本山岳会創設を機に交流が始まった。それと言うのも日本山岳会創設直後は世間からの一顧も無いなか, 山崎が地質学雑誌に日本山岳会創設の意義を紹介してくれたためである。それ以来, 親交を深め, 後に東京地学協会への入会に際しても山崎直方と志賀重昂を紹介人として得ている。烏水は, 山崎が欧州旅行の帰途, サンフランシスコで再会(1922年5月下旬)している。その際にも二人の間では氷河問題が話題に上り, ペンク教授が槍ヶ岳の写真を見て氷河地形を暗示していることや, 飛騨山脈での氷河の存在に否定的な学者は神保小虎博士ぐらいであることなどが話されている⁸⁾。

4. 紀行作家としての活動

小島烏水は, 執筆活動に入るとすこぶる早業走筆であったようで, 毛筆で書くことが多く, 紙面に筆が跳躍乱舞しているような運筆であったことを小島栄が「兄・小島久太の思い出」の中で回想している¹³⁾。

小島烏水の文体は, 最初の頃は明治の美文全盛時代の影響から漢文体を得意とし, 和漢混交の文章を基調としていたが, 後には, 自然の美しさや荒々しさ, 色彩とその変化など, 印象派的な技法を取り入れた文体に変わり, 漢文体にありがちな誇張表現から脱皮した。

また, 当時の文豪や紀行作家との交流も多く, とくに田山花袋とは親交も深かったようである。田山花袋は自然派文学が台頭する以前には紀行作家として活動していた。花袋には「野の人」という作品があり, しんみりと落ち着きがあり, 情緒綿々たる紀行文であることを烏水は述べている⁸⁾。

烏水と花袋の手紙のやり取りも多く残されており, その中で山崎直方と佐藤伝蔵が中心となって編纂した「大日本地誌」のうち, 一部の地誌を田山花袋が分担していたことが書かれている⁸⁾。

このように小島烏水は, 紀行作家としての活動や文

芸雑誌の編集などを通じて、明治の文豪たちと親交が深かったようで、尾崎紅葉の「金色夜叉」や幸田露伴、泉鏡花などの肉筆原稿を多数秘蔵していたが、震災に伴う騒動の中で紛失したようである¹³⁾。

5. 素顔の小島烏水

小島烏水の素顔は、実弟の小島栄による「兄・小島久太の思い出」に語られている¹³⁾。父親が税関長を退職してからは長男である烏水が大勢の家族を独力で養ったようである。正金銀行の役付きになるまでは辛酸を嘗めた生活であった。日中は銀行員として、夜間や休日は雑誌「文庫」の編集記者として働き、その傍ら「太陽」や「明星」で原稿料を稼いでいた。黎明期の登山家としてわれわれが思い描くブルジョワ的な資産家とは縁遠いイメージである。

また、若い頃の山岳行の前夜は家中が大変だったようで、数十の携帯品を全部八畳の座敷に広げ、各品を手帳の記載と照合する。一品でも無かったり、違ったりすると家人を叱り飛ばすことがしばしばあったようだ。

烏水は気前がよく、友人の仲裁や調停困難な紛争を円満に納めることもよくしたようだ。無名の文士であった頃の石川啄木の面倒をみたり、与謝野鉄幹と晶子の夫婦喧嘩を仲裁したり、山岳会創設後の若手層と成年層の感情的な衝突などの仲裁もすることがあった¹³⁾。万事に調整上手な人だったようだ。

烏水は、ものに熱中するとトコトンまでやり遂げる性癖のようで、浮世絵に凝ると安藤広重研究の第一人者となり、氷河問題に取り組むと国内外の書籍を取り寄せ、得意の語学力を生かし、徹底的に研究論文を書き、世間に発表したようである。

志賀重昂は、「小島烏水君はどこの大学教授かな？」と誰かに聞いたそうであるが、この言葉が小島烏水という人を端的に物語っているようである。

小説『劔岳 点の記』では、明治39年の陸地測量部三角科第4班が新橋で開いた忘年会の場で、柴崎芳太郎と小島烏水が会う場面が描かれ、次のような言葉が交わされている¹⁾。

.....
 「遊びですって？」
 小島烏水はそのとき、ややきつい声を放った。
 「ではないのでしょうか」
 「いえ、失礼しました。やっぱり山岳会は遊びの集団です。しかし、普通の遊びとはやや違った行き方の遊びです」
 小島烏水と柴崎芳太郎はしばらく顔を見合わせていた。二人の視線がからみ合ったまましばらくは離れなかった。柴崎は小島の視線の中に、明らかに挑戦を感じた。

 文春文庫 新田次郎『劔岳 点の記』(2007年7月15日新装版第4刷, pp.118-119) より

もし、この小説のように柴崎芳太郎が小島烏水をライバルとして考えていたとすれば、それは途轍もなく大きな存在になったであろうことは、小島烏水のその後の活躍を見れば明らかであろう。日本山岳会の巨星として異彩を放った小島烏水に「やっぱり山岳会は遊びの集団です。しかし、普通の遊びとはやや違った行き方の遊びです」と原作中で言わせている新田次郎の巧みさと味わい深さが感じられる。📖

■参考文献

- 1) 新田次郎『劔岳 点の記』文春文庫(新装版第4刷, 2007.7.15)
- 2) 山と溪谷社編(1971.7): 世界山岳百科事典 小島烏水 pp.264-265, 山と溪谷社
- 3) 岳人編集部(1983.7): 岳人事典 小島烏水 pp.124, 東京新聞出版局
- 4) 安川茂雄(1976.11): 増補近代日本登山史 pp.73-146, 四季書館
- 5) 志賀重昂・近藤信行校訂(2001.11): 日本風景論 395p, 岩波文庫, 岩波書店
- 6) W.ウェストン・三井嘉雄訳(1995.2): 日本アルプス登攀日記 318p, 東洋文庫586, 平凡社
- 7) 小島烏水・近藤信行編(1992.7): 山岳紀行文集「日本アルプス」444p, 岩波文庫(緑135-1), 岩波書店
- 8) 小島烏水(1996.12): アルピニストの手記 306p, 平凡社ライブラリー(175), 平凡社
- 9) 近藤信行(1992.7): 解説 山岳紀行文集「日本アルプス」pp.423-444, 岩波文庫(緑135-1), 岩波書店
- 10) 山崎安治(1983.7): 日本登山史年表抄 明治～現在までの登山(北アルプスを中心に) pp.417-420, 岳人事典, 東京新聞出版局
- 11) 中野尊正(1967.2): 日本の地形 1. 日本地形学のあゆみ pp.9-11, 築地書館
- 12) 岡田俊裕(2002.9): 地理学史一人物と論争一 第6章氷河論争 pp.128-136, 古今書院
- 13) 小島栄(1976.2): 兄・小島久太の思い出 新編日本山岳名著全集 月報6 pp.1-4, 三笠書房